慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	常行敏夫 市民革命前夜のイギリス社会 : ピューリタニズムの社会経済史
Sub Title	Toshio Tsuneyuki, The English society at the dawn of the Civil War : socioeconomic history of Puritanism
Author	寺尾, 誠
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1991
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.83, No.4 (1991. 1) ,p.1018(218)- 1028(228)
JaLC DOI	10.14991/001.19910101-0218
Abstract	
Notes	書評論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19910101-0218

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」83巻4号（1991年1月）

書評論文

常行敏夫『市民革命前夜のイギリス社会
——ピューリタニズムの社会経済史——』

（岩波書店，1990年）

寺尾　誠

（1）

＜我々は『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』からの引用によって，ピューリタニズムの天職思想が聖徒の世俗的繁栄をも約束・奨励する思想であったとウェーバー自身が考えていたことを明らかにしたが，我々が引用した箇所はすべて，ピューリタニズムの倫理が経済生活に及ぼした影響を論じた最終節「禁欲と資本主義精神」からのものである。すなわち，我々が引用した文章でウェーバーが論証しようとしたのは，ピューリタニズムを受容した俗人信徒がその天職倫理によって資本主義的生活様式の形式に導かれていったということなのである。問題はここにある。天職思想が持っていた逆の局面をウェーバーが見ていないということである。職業労働による繁栄を神の祝福とみなし貧困を恩恵の欠如と見なす天職思想は，貧困問題を眼前にし，それと闘いながら台頭しつつあった中産階級の経済的利害に適合的であり，この適合性ゆえにピューリタニズムは中産階級を引き付けたという問題である。(1)＞

本書は標題の示す通り17世紀半ばのイギリス市民革命に向って，イギリス社会の経済的・社会的・宗教的変化が様々な矛盾を内包しつつ一つの激流を形成していく過程を，イギリス史研究の成果をふまえて，実証的に追跡しようと意図している。その実証は，＜ある時代を見るためには，後時代人の眼だけではなくて，同時代人の眼を併せ持たなければならない＞という内田義彦の学説史の方法に基づいている。内田によれば＜後の時代の人間の透徹した眼と，同時代人のくもった眼という二つの眼をもって過去の時代の思想家を研究することで，過去の思想家も何とかわれわれに理解可能になる＞という。大塚久雄に代表される＜「比較経済史派」の概念史的な近代イギリス史像が「後の時代の人間の透徹した眼」であり，よしんばそれが正しいとしても，「時代の問題」を媒介にしなければ，後の時代の到達点への発展として歴史を理解する「ウィッグ史観」と言われてもしかたがない＞と著者は思い，内外の実証的研究を渉猟することから「時代の問題」に肉迫して，本書が成立したのである。(2) 著者が発見した「時代の問題」は，当時発生しつつあった中産階級のブルジョア化と大衆の貧困化の現象であるが，これについての内外の実証的研究をふまえた著者の解釈については後でふれたい。

まず冒頭で引用した「補論」のウェーバー解釈を取り上げる。それは大塚久雄のウェーバー解釈との不協和音を示すと共に，ウェーバー自身と著者との不協和音をも示している。まさに

注（1）　本書308頁。
　（2）　同書10頁。

著者は実証的研究を通じて獲得した「同時代人のくもった眼」によって，大塚久雄やウェーバーの「後の時代の透徹した眼」の誤差を正そうとする。まず大塚については，

＜大塚的ピューリタニズム理解の根幹は，反営利的なピューリタニズムが支配したイギリスで近代資本主義が生まれたという逆説を解くことに，『プロテスタンティズムの倫理と資本主義精神』の主題があったとするウェーバー理解に根差している。大塚によればウェーバーはピューリタニズムが育んだ世俗内禁欲が結果として利潤追求と結び付くことになった道筋を解明することによって，この逆説を解こうとしたのである。(3)＞

大塚はピューリタニズムの天職倫理を隣人愛に基づく反営利的な世俗内的禁欲として，営利と結びついた「資本主義の精神」とは全く異質のものと解釈する。著者は両者が＜利潤追求を倫理的な義務とみなすことにおいて直接的につながっている＞とし，大塚のウェーバー解釈が誤っていると判断する。＜営利を自己のためではなく，それ自体のために追求することが義務とされている点において，ピューリタンの天職倫理と「資本主義の精神」を構成する職業業務は本質的に同じ構造である。異なっているのは，神の栄光のためという宗教的基礎づけがあるかないかだけである。(4)＞

著者が大塚のウェーバー誤読の一例として引用している＜世俗内的禁欲のエートスはいつとはなしにマモンの営みに結び＞ついたという大塚の文章を前後の脈絡の中に置いてみよう。

＜……このエートスは，……そもそも禁欲的なプロテスタンティズムが本来もっていた反営利的な性格に結びついて生れてきたものでしょう。それが，いったいどうして，逆に営利と結びついて「資本主義の精神」などという姿に変わっていくことになったのか。……「世俗内的禁欲」のエートスの持主たちは，……小商品生産者たちのなかにいちばん多かった。……こういう職人（いかけ屋さん）たちが，とりわけ郊外から農村地域（カンツリー）に広がっていた。こういう人々は，金儲けをしようなどと思っていたわけではなく，神の栄光と隣人への愛のために，つまり，神からあたえられた天職として自分の世俗的な職業活動に専心した。しかも富の獲得が目的ではないから，無駄な消費はしない。それで結局金が残っていった。残らざるをえなかった。……ところが結果として金が儲かっただけではない。他面では，彼らのそうした行動は結果として，これまた意図せずして，合理的産業経営を土台とする，歴史的にまったく新しい資本主義の社会的機構をだんだんと作り上げていくことになった。それがしっかりとでき上ってしまうと，こんどは儲けなければ彼らは経営をつづけていけないようになってくる。資本主義の社会機構が逆に彼らに世俗内的禁欲を外側から強制するようになってしまったわけです。こうなると信仰など内面的な力はもういらない。＞以上の文の後に＜こうして，宗教的核心はしだいに失われて＞を頭に先の文章があり，さらに＜金儲けを倫理的義務として是認するようになってしまった。これが「資本主義の精神」なのです。(5)＞と続く。

では，ウェーバー自身はどういっているか。

＜このこと〔「自然」のままの人間の生活様式とは明白に相違した独自の行状による確証による宗教上の「恩恵の地位」の保証〕からして，個々人にとって，恩恵の地位を保持するために生活を方法的に統御し，そのなかに禁欲を浸透させようとする起動力が生まれてきた。……最初は世俗から去って孤独の中に逃避したキリスト教の禁欲は，世俗を放棄しつつ，しかも修道

注（3） 同書308頁。

（4） 同書305～306頁。

（5） マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（大塚久雄訳，岩波文庫，1989年）の訳者解説404～405頁。

院の内部からすでに世俗を教会の支配下においていた。しかしそのばあい世俗的日常生活のおびる自然のままでとらわれることのない性格を，概してそのままに放置していた。いまやこの禁欲は，世俗の営みの只中に現われ，修道院とはきっぱりと関係を断つとともにほかならぬ世俗的日常生活の内部にその方法意識を浸透させ，それを世俗内的な合理的生活――しかも世俗によるでも，世俗のためでもなく――に改造しようと企てはじめたのであった。(6)>

<プロテスタンティズムの世俗内的禁欲は，所有物の無頓着な享楽に全力をあげて反対し，消費を，とりわけ奢侈的な消費を圧殺した。その反面，この禁欲は心理的効果として財の獲得を伝統主義的倫理の障害から解き放った。利潤の追求を合法化したばかりでなく，それを……まさしく神の意志に添うものと考えて，そうした伝統主義の桎梏を破砕してしまったのである。……肉の欲，外物への執着との戦いは，決して合理的営利との戦いではなく，所有物の非合理的使用に対する戦いなのだった。(7)>

<ピュウリタニズムの生活理想が，ピュウリタン自身が熟知していたように，「富」の誘惑のあまりにも強大な試練に対してまったく無力だったことは確実だった。(8)>

<ピュウリタンは天職人たらんと欲した――われわれは天職人たらざるをえない。というのは，禁欲は修道士の小部屋から職業生活のただ中に移されて，世俗内的道徳を支配しはじめるとともに，こんどは，非有機的・機械的生産の技術的・経済的条件に結びつけられた近代的経済秩序の，あの強力な秩序界(コスモス)を作り上げるのに力を貸すことになったからだ。(9)>

大塚とウェーバーを比較すれば，相対的には著者の方がウェーバーに即した解釈であることは明らかである。新しい世俗内禁欲は生活行為の伝統主義的倫理を破砕すると共に，生活行為の全般的合理化を方法的に実現していく心理的起動力である。それは単純な動機づけではなく，方法的な動機づけである。確かに巨視的にみれば大塚のいうように純粋に宗教的な動機から開始された宗教改革者の運動が意図しない結果として「資本主義の精神」の世俗化をもたらしたことは，ウェーバーも指摘している。(10)だが，同じ宗教改革者のうちルターの天職倫理の心理的基礎は不確実で，その宗教生活は神秘的な感情の培養に傾き，信者は自分が神の力を受け入れる容器として感じる。(11)反対にカルヴァンの場合に徹底した心理的起動力が生活の方法的合理化をたえず促し，その宗教生活は感情的要素を拒否し，実践理性を駆使した禁欲の行為となる。人は自分が神に使われる道具と感ぜざるをえない。(12)後者の禁欲的自己訓練はピューリタニズムにおいて頂点に達する。<ピュウリタニズムの禁欲……の働きは「〔一時的な〕感情」に対して「持続的な動機」を，とくに禁欲自体によって「修得」された動機を固守し主張する能力を人間にあたえること――つまり，こうした形式

注（6） 同書286～288頁。
（7） 同書342頁。
（8） 同書351頁。
（9） 同書364～365頁。
（10） 同書344頁。これはもっと重要な点なのだが，たゆみない不断の組織的な世俗的職業労働を，およそ最高の禁欲的手段として，また同時に，再生者とその信仰の正しさに関するもっとも確実かつ明白な証明として，宗教的に尊重することは，われわれがいままで資本主義の「精神」とよんできたあの人生観の蔓延にとってこの上もなく強力な槓杆とならずにはいなかったのだ。そして，さきに述べた消費の圧殺と，こうした営利の解放とを一つに結びつけてみるならば，その外面的結果はおのずから明らかとなる。すなわち禁欲的節約強制による資本形成がそれだ。利得したものの消費的使用を阻止することは，まさしく，それの生産的利用を，つまりは投下資本としての使用を促さずにはいかなかった。>
（11） 同書126，182～183，218～220，251～252頁。

的・心理的な意味における「人格」に人間を教育することだった。[13]>

ルター派の天職倫理は信仰的動機を生活行為の結果から切り離し，専らその動機の純粋性に固執する。[14] カルヴァン派やピューリタンの天職倫理は信仰的動機が生活行為に方法的に浸透し，合理的な結果へと貫徹することを可能とする。動機唯一型のルター派は経済的伝統主義の枠を破れぬのに対し，動機貫徹型のカルヴァン派は，その枠を破り，経済的合理主義（営利の合理化）へと到達する。後者においては徹底した禁欲倫理を通じて伝統的営利に対する反営利が合理的営利の正統化を結果する。

大塚はルター派とカルヴァン派の以上の相違を認識していながら，「世俗内禁欲」と「資本主義の精神」の関係については，ピューリタンの宗教的動機の純粋性，反営利性を強調する。その際宗教的動機と世俗的結果の内的関連は深く追究されないのである。これは，現代の同時代人としての大塚がキリストを信ずる者として現代資本主義とりわけ日本のそれに対し反発を感じているためと理解することもできる。だがそれ以上に決定的なのは，大塚の方法が彼の鋭い本質直観に依存しすぎていて，論理的な方法を十分に深化させていないことである。プロテスタントの天職倫理こそヨーロッパにおける経済の合理化の内的心理的起動力であったが，それが不徹底のものに終るか徹底したものに到るかという問題を追究するには動機と結果の関係の様々な組み合せを含む生活行為について独自の構造モデルを論理的に構成しなくてはならない。[15] そこでこそ我々はウェーバーと対等に方法的な対話をかわすことができるのである。この点で著者の大塚批判は，大塚と同様の方法的水準に留まっているといえよう。

ここで著者のウェーバー批判を取り上げてみよう。冒頭の引用文の後半で著者は「天職倫理が持っていた逆の面をウェーバーは見ていない」といい，貧困問題に対する中産階級の経済的利害と天職思想が適合的であるがゆえに中産階級を引き付けたのだとしている。資本主義形成期における社会層分化と職業分化は，<中産階級の台頭と形影相伴うかたちで貧困問題・浮浪民問題を誘発せざるをえなかった[16]>が，これらの貧民・浮浪民とりわけその民衆文化の無規律性に対し，カルヴァン派，ピューリタンは最も敵対し，それを抑圧しようとした。貧困問題の深刻化が〔中産階級の〕規律文化の形成に重要な作用要因として働いたという推測が成り立つとすれば，「先進地域の中産階級がなにゆえ規律の厳しいピューリタニズムを受容したのかというウェーバーの問い」に対しては，宗教思想の独自な展開を別とすれば，「中産階級成立は対極の膨大な貧民・浮浪民の発生を伴ったからだ」と答えることができる。<ピューリタンの民衆文化への敵対が「被造物神格化の拒否」という宗教的理由に基づいていただけではなく，貧困問題に深く根差していたことは間違いない。[17]>

注 (12) 同書156～160，184～199，205～220，225～227頁。
<というのは，宗教的達人が自分の救われていることを確信しうるかたちは，自分を神の力の容器と感じるか，あるいはその道具として感じるか，その何れかである。前者のばあいには彼の宗教生活は神秘的な感情の培養に傾き，後者のばあいには禁欲的な行為に傾く。ルッターは第一の類型により近かったし，カルヴィニズムは第二の類型に属していた。>（同書183～184頁）。

(13) 同書201～202頁。

(14) 同書219頁。<〔イギリス系アメリカ人とドイツ人が生活の中で「自然さ」に対して異なることに言及し，ドイツ人が「自然さ」を重んずる理由として〕根本的には，カルヴィニズムと異なって，ルッター派のばあいに見られる生活態度への禁欲の浸透の不足に由来している。>

(15) 寺尾誠『価値の社会経済史』（改訂版，税務経理協会，1980年），同『社会科学概論』（慶應通信，1989年）。

(16) 常行敏夫『市民革命前夜のイギリス社会』312頁。

(17) 同書313～314頁。

著者がいいたいのは，ウェーバーがピューリタニズムの天職倫理と中産階級の間に，一種の「選択的親和関係」があったことを分析しているのに対して[18]，ピューリタニズムの規律文化と発生しつつあった貧民階級との間に「選択的反発関係」が成立していたということであろうか？　前者の場合に二者の間に成立していたと解釈される適合的な関係（大塚は相性という）に対し，後者の場合には一方が他方への反発の故に他の階級つまり中産階級によって受容される。そうだとすれば後者はあくまで前者すなわち「選択的親和関係」を強化したに過ぎないのではないか？　＜ピューリタンの民衆文化への敵対が……貧困問題に根差していた[19]＞という言い方と，＜職業労働による繁栄を神の祝福とみなし貧困を恩恵の欠如とみなす天職思想は，貧困問題を眼前にし，それと闘いながら台頭しつつあった中産階級の経済的利害に適合的で[20]＞あるという言い方の間には微妙な違いがある。前者では宗教的な天職思想とは別に貧困問題があげられ，後者では宗教的天職思想との関係において貧困問題が中産階級の問題とされているからである。著者がいうように，彼の指摘は16，17世紀の貧困問題の解明は，＜ウェーバーが意図して果たさなかった，禁欲的プロテスタンティズムに対する経済的影響の解明に資する[21]＞とはいえ，天職思想と貧困問題を並列して中産階級のピューリタニズム受容を説明する図式化は十分に説得的でない。ウェーバーは心理的起動力云々の文章に続いてこういう。＜また他面において，この禁欲は企業家の営利をも「天職」と解して，それによって，この独自な労働意欲の搾取をも合法化した。このような天職として労働義務を遂行し，それを通して神の国を求めるひたむきな努力と，ほかならぬ無産階級に対して教会の規律がおのずから強要する厳格な禁欲とが，資本主義的な意味での労働の「生産性」をいかに強く促進せずにいなかったのはまったく明瞭だろう[22]。＞

我々はここで貧困問題を含む16，17世紀イギリスの実証的研究についての著者の解釈に眼を向けなければならない。

（2）

前編の「16，17世紀イギリス社会の経済的変貌[23]」においてまず指摘されるのは，当時の人口増大と，それによって引き起こされた食糧危機の事実である。16世紀中葉すぎに400万人の大台を回復した人口は17世紀の初頭には500万人，その世紀中葉には520万人の水準に近づき，以後1世紀ほど停滞する。この増加により一方で穀物不足が生じ，さらに凶作がこれに拍車をかけ，農産物価格が急上昇する。他方，実質賃金や粗結婚率が同時期に長期に下落している。これらの諸事実は，民富の順調な成長を伴いながら農民層の分解が進行し，産業資本が形成されていくという大塚たち「比較社会経済史学派」の歴史認識に修正を迫る。著者は，この時期の人口増大がそれ以前の民富形成の結果であることを認め，大塚の仮説が一面の正しさを有しているとする。だが，他方では人口の急増と穀物供給不足による食糧危機が深刻化する中で生産性向上への新しい試みが実施され，それを通じて農民層の分解が初めて本格化していくとされる。従ってこの時期に絶対王政が実施した囲い込み禁止や穀物流通政策，さらに救貧法にしても，それらの諸事実との関係で理解すべきで，

注（18）ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』134～136頁。
（19）常行敏夫『市民革命前夜のイギリス社会』314頁。
（20）同書308頁。
（21）同書314頁。
（22）ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』360頁。
（23）常行敏夫『市民革命前夜のイギリス社会』19～109頁。

大塚たちのように単純な封建反動として考えてはならない。

生産者の側での一つの新しい試みとしては，増大する人口と経済成長のマルサス的ギャップに対し，結婚及び出生の予防的制限による人口増大の防止がある。16世紀半ばから試みられたこの方策が効果を発揮するのは，17世紀半ば以降である。より効果的な新しい試みは，食糧増産である。新しい研究によれば，1620年代ないし60年までにイングランド農業は穀物増産による安定供給を達成し，人口増大にも拘らず実質賃金が上昇するという状態に至ったのである。著者はウォリックシャーの「アーデンの森」をケース・スタディにとりあげ，従来主に牧畜業を生業としていたこの地域が16世紀後半に穀物生産に比重を移し，17世紀前半には穀作地が5割となる。これは穀草式農法という農業改良や，そのための囲い込みによって可能となったのであるが，その推進者は土地持ち農民，特にヨーマン・ハズバンドマンの上層で，彼らは大規模な資本主義的農場を経営し，経済的にも繁栄していく。他方で貧困ゆえに炉税免除の貧民が全世帯の40%に達する。こうして＜食糧危機とその克服過程は，この地域を富裕な農民と貧民とに分極化させる経済的分極化の過程でもあったのである＞。もっともこの地域の場合，貧民の増大は，他の穀物耕作地域で発生した貧民の流入によるし，下層の農民も牧畜から酪農への転換によってある程度の経済が繁栄に与り，「局地市場圏」に近い構造が成立した。

さらにこの種の穀草式農法は，イングランド南部，中部，北部の森林・牧草地域に普及し，1590～1660年の間にイングランドの農地の半分を征服し可耕地を増大した。またこの時期の囲い込みも，この農法の普及と関連した「小規模囲い込み」の形をとることが多かった。

次にケース・スタディの(2)として伝統的な穀物生産地域のチブナムとオーウェルの2ヶ村（オックスフォードシャー）の例があげられる。チブナムにおいてはこの時期に経済的分極化が進むが，同じヨーマン仲間の中で土地保有規模が拡大した結果，資本主義的農業経営者へと成り上る者が現れる。同時にそれは中規模農家を減少させ大量の貧民層を発生させる。同様の傾向はオーウェルにもみられる。これらいずれの村においても保有権の強固な相続権付コピーホウルドの保有者一部が富農として経営規模を拡大していくのであって，領主権の行使により農民のコピーホウルド保有が不利な定期借地へと転換されていったという通説は，事実に反している。

かくして資本主義的農業が形成される一方，大量の貧民階層は，小屋住農などの潜在的失業者の滞留場となり，貧民たちはそこから他の地域へと絶えず流れ出していくことになる。この傾向は上記地域のみではなく，エセックスでもみられたが，ここでは領主やジェントリーが地代増加をねらって農地の定期借地化が進んでいる。この他イングランド南部，西部でも同じ傾向がみられるし，ミッドランドの伝統的穀物生産地域や二圃制の混合農業のノーフォークでも穀草式農法が言及していく。後者では後にノーフォーク・ローテーションという改良農法が発展する。

以上のような研究史上発見された新しい諸事実に基づき，著者は＜イギリス市民革命の土地変革は「領主的・ブルジョワ的」なものでもなければ「早熟的・妥協的」なものでもなく，農民層の分解を基礎にした徹底的にブルジョワ的なものだった[24]＞という。この点で封建的身分と土地保有形態を実体的に一致させ，市民革命の領主的・ブルジョワ的な性格を強調する通説が批判される。

新しい研究をふまえて提示された著者の16，17世紀イギリス経済についての解釈は，日本の学界における従来の通説に対し根本的な見直しを迫る一面をもっている。人口増大と穀物生産のマルサス的ギャップとこれに対するイギリス

注（24） 同書106頁。

農民の積極的対応，特に新しい農法の採用，要するに「生存の危機」とこの克服への試み，その中で観察される富農層の経済的成長と中，小農層の貧民化という分極化の現象が，鮮やかに示される。この認識は，同様の危機を「生態学的危機」として指摘し，これに対する経済活動の量的な増加が人口増加に吸収され，やがて17世紀後半より1世紀の停滞となると指摘する川北稔の先駆的研究とも喰い違う。[25] 川北は農業のみならず工業，さらにそれら全産業をめぐる近代化の条件，とりわけ海外市場や資本形成が整うのになお時間を要したとみる。著者は，この解釈を「ジェントリー帝国史観」と名付け，[26] 17世紀前半までにイギリスは農業面の改良により食糧危機を克服したとし，そこから市民革命のブルジョア的性格を強調する。通説，新説に対する著者の解釈の問題点を以下にあげよう。

第一に人口の増減と経済成長の関連についてである。西ヨーロッパにおいて人口は14世紀半までに増加し，その後ペストの流行に伴なう大激減，15世紀後半からの回復，17世紀前半に向けての急増とその後の停滞という長期傾向を共通に示す。14世紀後半から15世紀前半にかけての人口急減は穀物価格の長期低下を伴い「農業危機」とよばれる。また「実質賃金」の高水準から「手工業の黄金時代」といわれる。[27] 評者は，後者については同時期が農村工業の進展期であることから都市手工業の保守的防衛と農村工業の革新的前進のせめぎ合いの時期とみる。[23] ただし両者の関係は都市と農村の国家的，地域的な制度の多様性により多様であり，イギリスにおいては農村工業により有利な条件があった。この間農業においても改良の試みがなされたとはいえ，成果が著しくなるのは著者が扱う16世紀後半からである。このため「農業危機」を克服していく過程は複雑とならざるをえない。封建領主の土地領有やこれに対する農民の土地保有の歴史的な制度に規定されて，封建領主の側が農業経営の拡大を図る方向と農民の側が同様の試みを図る方向が各国家，各地域でいずれかに有利な形で試みられる。前者は東独において，後者はイギリスにおいて典型的である。だがそのイギリスにおいても封建領主の土地領有がなしくずしのジェントリー的土地所有に転化していく傾向と農民的経営改良の傾向とが交錯していく。16世紀後半からの人口急増とこれによる穀物価格の高騰の中で著者は農民のブルジョア化という形で後者の傾向が打ち勝つとみているが，この解釈を十分裏付ける実証的成果が提示されているとはいい難い。交錯しあう二つの傾向が客観的に提示され，秤量が行われる必要性が今後に残されている。また川北が指摘しているようなジェントリー的土地所有が商業や金融における資本形成とも交流しあっている背景には，工業面での近代化が，技術，市場などの条件からなお時を要したという事情も，考慮され

注 (25) 川北稔『工業化の歴史的前提—帝国とジェントルマン』(岩波書店，1983年)。

(26) 常行敏夫『市民革命前夜のイギリス社会』24頁注(7)。

(27) Wilhelm Abel, Agrarkrisen und Agrarkonjunktur, Eine Geschichte der Land und Ernährungswirtschaft Mitteleuropa seit dem Hohen Mittelalter—, 2 Auflage, 1966, SS. 27～96. ヴィルヘルム・アーベル『農業恐慌と景気循環—中世中期以来の中欧農業及び人口扶養経済の歴史—』(寺尾誠訳，未来社，1972年)

B. H. Slicher van Bath, Agrarian History of Western Europe, A. D. 500～1850, 1963, B. H. スリッヘル・ファン・バート『西ヨーロッパ農業発達史』(速水融訳)

(28) Makoto Terao, Rural small towns and market-towns of Sachsen, central Germany, at the beginning of the modern age, in: Keio Economic Studies, vol. 2, 1964; Minderstadt in historischer sicht—Die Entwicklungslinie der Freiheit Altene—in: Wirtschaftliche und soziale Strukturen in saekalaren Wandel, Festschrift für W. Abel zum 70. Geburtstag, Bd. 2, 1974; Probleme des sächsischen Stadtgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Neuzeit, in: Keio Economic Studies, vol. 15, 1979.

るべきであろう。[29] 著者の指摘する貧民の浮浪民化もこうした工業面での障害と関わらせる時に，都市問題ともどもよりよく解明されえよう。

第二に資本主義的農場のとらえ方である。著者は，農業の経営規模が拡張し，賃金労働者を多数雇傭することをもって，経営が資本主義化したとする。経営の近代化ないし資本主義化は経営主と労働者の関係の成立を一つの重大な基準とはするものの，その関係が自然に働きかける技術の近代化と有機的な結びつくことにより決定的となる。[30] この結びつきは土地を主要な生産要素とする農業の場合に特殊であることは事実だが，結びつきそのものは決定的条件である。イギリスにおいてそれは18世紀後半の農業革命において実現することになるのだが，それ以前の大農場経営にはこの結びつきは十分なものではない。経営主と労働者の関係が成立していたとはいえ，技術はなお手工業的で労働集約的であった。ここに農業革命以降の資本主義的経営と区別する必要がありはしないか？（例えば近代資本主義的経営と初期資本主義的経営）またこれらの経営の実態についての実証も今後の課題であろう。マクファーレンの小農経営から個人主義的経営への展開という示唆に満ちた仮説も，法制面の実証に偏っていて経営史の面で検証されなくてはならない。[31] また，農民層の分解についても，より多くの実証研究を重ねて地域性をふまえた全国的な実態を明らかにしないと，一般的な傾向を云々はできないのではないか。

（3）

さて後編は「民衆文化とピューリタニズム」と題し，[32] 市民革命に至る過程での貧困問題とこれに対する救貧行政をピューリタンの聖俗両面におけるエリート化を軸に分析する。人口の急増が青少年人口を増大させ，貧困問題を深刻化する。[33] 16世紀の数次の救貧法とりわけ1572年と76年の法律はこれに対する絶対王政の対応である。72年のそれは働く能力のある貧民のうち浮浪民とみなす者への厳罰と共に，働く能力のない貧民や老齢者を救済するための救貧税などの措置を規定した。また貧民監督官，コンスタンブルおよび教区教会役員による救貧行政の運営が定められた。76年の法律では貧民の雇用と矯正労役所の設置が規定された。その後失業者のための公共事業の推進と救貧院の設置が図られると共に，救貧税以外に私的寄付行為も奨励された。1563年の職人規制法も絶対王政の農村工業抑圧という通説よりもむしろ以上の救貧法の措置と共通の目的をもつといえる。こうした救貧行政の整備は治安判事の権限を強化し，四季裁判所を中心とする地方行政を制度化し，教区を救貧行政の末端機構として位置づけた。

この結果，治安判事に中流やそれ以下のジェントリー層が任命され，中央政府から距離をおいた地方政治が形成されていく。他方，教区住民の上層部が救貧行政をはじめとする地域社会秩序の維持に積極的に参加する。最も重要なのはコンスタブルで，全ての法律違反者を適切な裁判所に告訴する義務を負っていた。これに任命されるのはヨーマンを中心とした中産階級であり，彼らは教区の政治的エリートとなった。教区教会役員の方は教会管理と共に救貧活動も行ない宗教的エリートであると同時に政治的エリートでもあった。

この他，貧民監督官や小陪審員などの役職を含めて教区行政には中産階級の利害が強く反映

注（29） 川北稔『工業化の歴史的前提』82～351頁。

（30） Max Weber, Wirtschaft und Gesellschaft, 4 Auflage 1956, SS. 62-69.

（31） Alan MacFarlane, The Origin of English Individualism, 1978. アラン・マクファーレン『イギリス個人主義の起源』（酒田利夫訳，リブロポート，1990年）。

（32） 常行敏夫『市民革命前夜のイギリス社会』113～287頁。

（33） W. Abel, Massenarmut und Hurgerkrisen im vorindustriellen Europa—Versuck einer Synopsis, 1974.

されていくが，彼らは流入する貧民・浮浪民を阻止し，教区内の下層民に労働規律を植えつける「教区主義」を貫徹していく。

治安判事制や議会を挺子にジェントリー層が地方政治から中央政治をゆさぶろうとしていく中で，17世紀になると末端の教区エリートも国政への参加ルートを持ち始める。さらに「小さな学校」の設立に象徴されるように，教育学者が文化的エリート層を育成し，上層民の文化と民衆文化への分極化が促進される。

社会の分極化と大量の貧民層の出現は，従来の隣人関係を崩壊させ，犯罪や怠惰といった悪徳が大都市のみならず地方の村々でも蔓延する。これに直面してピューリタニズムが示す規律文化は，教区エリートとしての中産階級にとり自らの利害に適合するものとして受けとられ，これを受容していく。またこの受容が貧民に対し道徳的再生と経済的自立を迫る組織的な対応を正当化する。

それは救貧行政だけではなく従来の日常生活全体に対する新しい規律文化の提示であり，旧来の民衆文化への抑圧でもあった。伝統的なヨーロッパ社会はキリスト教化以前の民衆的祝祭がキリスト教的な装いの下に存続させていた。著者はその象徴として復活祭以前のカーニバルを取り上げ，制度化された非日常的祝祭が逆に日常生活の秩序を再確認し，共同体の連帯感を昂揚させるとする。こうした労働と祭りの循環リズムをカトリック教会は禁止しなかったし，布教のために有利であれば妥協も辞さなかった。このためキリスト教徒である民衆はキリスト教信仰と民衆儀礼の結びついた呪術信仰を世界で生活していた。

宗教改革の指導者はこうしたカトリシズムの妥協を排し，民衆儀礼を偶像崇拝と断ずると共に，正しい聖書・教義理解，厳しい倫理的生活を俗人信徒にも求めた。かくて教会内部の偶像破壊から始まり，民衆的な祭りへの攻撃が開始される。中産階級の教区エリートは隣人関係の崩壊の中で下層民への態度を硬化させていくが，それは下層民と民衆文化を同一視することを通じて，民衆文化を敵対視するピューリタニズムの受容を促進していく。

かつては教区教会と結びついていた民衆文化はその結合をピューリタンの運動によって断ち切られ，新たな拠点として居酒屋が登場してくる。居酒屋は地域社会が分極化する中で貧民・浮浪民の根城となり，貧困問題の凝縮された場所ともなる。教区エリートは貧困問題と格闘していく中で，居酒屋での下層民の「お祭り騒ぎ」から身を引き，ピューリタン的禁欲倫理に同化しつつ民衆文化への敵対感をつのらせる。ここに宗教的指導者や教区エリートの民衆文化に対する同盟が成立し，下層民の世俗犯罪と共に宗教・道徳的「犯罪」に対しても激しい摘発を行っていく。と同時にピューリタン的倫理を下層民に植え付けるモラル・リフォーメーションが貧困問題を解決する彼らの主要なプログラムとなる。

最後に，市民革命に向い新たな文化的秩序を求めるピューリタンと絶対王政の間の激しい闘いの過程が分析される。イギリスの宗教改革はエリザベス朝時代から本格化する。だが国ぐるみの宗教改革は必要な指導者を欠いており，説教師とりわけ講師の制度が活用されるが，それをめぐり絶対王政の国教会的画一化とピューリタン的自立との間に紛争が生じていく。特に聖職録のない講師にはピューリタンの俗人信徒が多く，そこから自発的教会形成が志向されたことは，国教会制度の根幹をゆるがすものとして絶対王政の弾圧を蒙ることになる。こうした中で1590年代からピューリタニズムは「安息日厳守主義」を強く主張した。日曜には礼拝のみを守り「どのような穏当な気晴らし，合法的な楽しみ」も避けなければならない。国教会の下に留りながら民衆の宗教的覚醒を促がすこの運動は，民衆の抵抗に会うと共に絶対王政と国教会を民衆文化容認へと傾かせた。

17世紀に入ると国教会の枠内でカルヴァン派の予定説を認めさせようという運動が起るが，

挫折する。この間，対スペインの戦争への出費や輸出不振からくる独占特許につき議会は王と対立を深める。国王が1618年に「遊戯教書」を布告したことは居酒屋を収入源として利用する政策と相まって，ピューリタンとの間の亀裂を深める。これに拍車をかけたのがアルミニウス主義者の国教会上層部への進出，登用である。予定説を否定し人間の意志の余地を認めるこの派の指導者ニールとロードは1627年には枢密院顧問官に任命される。一方，絶対王政は「強制国債」など議会の承認を得ぬままに恣意的な財政政策を強行し，民衆の反発をくらうと共に28年には議会は「権利の請願」を盾に国王と対決していく。この政治問題は「強制国債」の推進者がアルミウス主義者だったことから宗教問題ともなり，28年の議会の抗議文は公然とこの派を非難したのである。だがロードは大主教に就任し，その国教会支配をさらに強める。これに対しピューリタン側では，分離主義的セクトが拡大すると共にアルミニウス派の背後にカトリックの陰謀を見て国王と国教会と決別しようという動きが出てくる。特にスコットランドでは，国王と国民運動が激突し革命の引き金となる。そして1640年の4月に開会された短期議会が1ヶ月で解散されるや国民の離反は決定となり，次に国王が召集した議会はすでに「革命の議会」へと転換していく。

（4）

以上後編では前編の分析から引きだした貧困問題を軸にピューリタニズムの政治的・文化的位置づけが試みられたのである。一方でピューリタンは絶対王政が実施する救貧行政の末端機構としての教区においてエリート層として活躍し貧民問題に対処する。しかし他方では，ピューリタニズムの禁欲倫理を受容することにより貧民層の民衆文化と敵対し，民衆文化と妥協的な絶対王政や国教会とも対立していく。

こうしたピューリタニズムの位置づけ，とりわけ民衆文化との関係については，従来の認識を超える一面をもつと評価しえよう。ただし，いくつかの重大な問題点も指摘できる。

第一に，前編では中産階級を犠牲にした資本主義的農業経営者と貧民層への分極化が指摘されていたのであるが，後編では教区の宗教的・政治的エリートとして登場してくるのは「ヨーマンを中心とした中産階級」だとされる。すでに指摘したように，前編の農民層分解分析も不十分なのであるが，後編の中産階級はさらにあいまいな社会的な位置づけしかない。

第二に，これと関連したことであるが，地域や地方の政治において指導的地位にあり，さらに議会を通じて中央政界にも影響力をもったジェントリー層の役割が積極的に分析されていない。恐らく先のヨーマン中産階級論も上位のジェントリー層との関係で採用された社会的位置づけなのであろうが，そうであればなおのことジェントリー層の社会的位置づけが必要となる。

第三に，補論の部分で指摘しておいたことであるが，ヨーマンたちがピューリタニズムを受容したことと貧民問題の関係づけの問題である。著者はピューリタニズムの規律的な禁欲倫理は貧民たちの無秩序に直面した中産階級にとり適合的なものであったために受容されていったと解釈している。その解釈が全く成り立たないとはいえない。だがそれはピューリタニズム受容の消極的動機，あるいは結果への考量から発した目的的受容でしかない。既にのべたようにピューリタニズムは強烈な動機づけ，動機から結果まで貫徹する世俗内禁欲の倫理である。16，17世紀のイギリスにおいてこの倫理を受容した人々は，自らの職業生活において方法的な合理化を図っていったのであり，人口急増やそれに伴なう貧困問題の発生に対して出生の予防的制限や様々の生産技術改良を試みることに，解決の方向を見出したのであった。(34) 生活全体の方法的自己統御こそピューリタニズム受容の積極的動機で，貧民問題への関心もそれとの関係で初めて問題となりえたのである。

以上の批評的紹介で明らかなように，著者のウェーバー解釈とイギリス経済・社会・文化についての認識には，共通の長所と弱点がある。長所は，テキストや実証的研究の成果に対して読者としての思い込みをできるだけ排して，虚心な態度を保持していることである。その結果，大塚久雄が見過してしまったウェーバーの洞察が見えてくる。「比較経済史学派」その他の通説が無視したり，曲げて解釈した歴史的事実を直視し，即事的な解釈を試みる。著者が恩師内田義彦の複眼的方法を採用する所以である。「後の時代の人間の透徹した眼」と「同時代人のくもった眼」の二つの眼で過去を研究するという方法である。前者が見過してしまいがちな同時代の複雑な歴史的事実にあえてこだわって，そこから前者の認識の偏りを直す。このような即事的な歴史認識は歴史認識の出発点であり，著者がそこに固執することは，様々な通説に対して一定の有効な批判となっている。

だが，それらの批判がさらに有効性を増し，著者自身の積極的な歴史認識として提示されるには，二つの眼の間に内的交流が起り「後の時代の人間の透徹した眼が「くもり」を含み，「同時代のくもった眼」に「見透し」が与えられなければならない。<歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり，現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話>(E. H. カー)だからである。共通や類似の動機から出発しながら，行為の結果が何故異なっていくのか，人口という経済にとって外生因の性格が強い要因が経済や社会に対してどのような影響をもたらすのか，経済や社会が示す対応が多様であるのは何故か，それらの問いとの関係で農民などの階層分化・分解がどのような歴史的特徴をもつのか，一つの宗教や思想の価値創出とその大衆的受容の間の関係はどう理解すべきか，その関係が多様に変容するのは何故か，等々，著者の通説批判は多くの疑問を誘発する。だが残念ながら，その疑問に対する十分な回答をこの著書の中に見出すことはできない。今後の研究によって著者がそれらを提示されるように期待したい。

(経済学部教授)

注 (34) E. A. Wrigley, Population and History, 1969, pp. 48～53. リグリイ『歴史と人口』二版，1982年（速水融訳），リグリイは生産技術を向上させる場合（ヨーロッパ）とその向上のない場合（アイルランド）では，人口扶養の能力の大きな違いが生ずるという。